

サバイバル・エココミュニティのデザイン

Designing the Survival Eco-Community

糸長浩司 氏

Itonaga Koji

1)NPO 法人エコロジー・アーキスケープ, 理事長, 工学博士 (itonagakoji@outlook.jp)

NPO ECOLOGY・ARCHISCAPE, Representative Director, Dr. Eng.

2025年7月、異常気象、灼熱地獄が日本列島を襲っている。この異常性は世界的な現象であり、異常が常態化すると気象専門家は宣言する。水・食料・エネルギー等のセキュリティは、市民の命に関わるものになってきた。このことは、決してオーバーなことではない。人々がどう快適な環境、安全で安心できる環境で持続的に暮らしていけるのか。そのためには、市民自身が自ら水・食料・エネルギー等の生きるための糧を持続的に獲得し維持していくこと、個々ではなく、コミュニティで獲得し、維持していく方向性の模索も必須となってくる。建築はシェルターの役割を果たすが、地球温暖化に対する緩和と適用のために、どう適切な構築・維持・使用をしていくべきか。建築・都市・農村は、そこに生きる人々がどう楽しく、快適にサバイバルできるために、どういう再構築のデザインをしていくべきか。その答えは不明瞭ではまだあるが、今までの資本主義的仕組みから脱した協働的、社会連帯的かつDIYを組み込んだコミュニティづくりにあると確信する。

地球温暖化、サバイバルに生きる術、移動の自由と歓待、パーマカルチャー、エコビレッジ、コンヴィヴィアリティ

1. 地球温暖化の深刻化する中でのサバイバルを問う

2025年の夏の暑さは異常であった。今冬の豪雪も心配も出てきている。日本から四季がなくなり二季になってきていることを痛感する。異常気象の原因は紛れもなく、地球温暖化にある。北海道が沖縄より暑い灼熱地獄で苦しんでいるという報道が続く。地球温暖化による異常気象下での生き残り、サバイバルが問われているともいえる事態である。「命に危険な暑さですのでクーラーをご使用ください」という言説が当然のように発信されるが、果たして、それで良いのか。すべて住宅、建物にクーラーが設置されれば、解決するのか。冬を旨とした高气密高断熱の住宅の室内に熱がこもると、断熱のために熱が抜けにくい。夏、羽毛の布団に包まれるような状態である。的確に放熱する仕組み、あらためて、建築を取り巻く外部環境の在り方、緑地環境の在り方が問われ、建築環境は建築単体で構築できるという、機械的建築デザインの再考も求められている。

快適な建築環境を、エネルギーをできるだけ少なく使用して創造するか。その創造に向けて生活者がどうライフスタイル、建築環境との付き合い方をするかも問われる。建築を機械装置としてだけに捉えず、建築を取り巻く環境とつながりものとして捉え、快適な空気をどう室内に取り入れるか、あるいは汚れた空気を的確に外に排出するか。どういう付き合い方を建築、住宅をするかを、その住まい手、使い手が判断し、行動できるのかを考える。

人間の住まう能力、環境への適応能力が問われている。すべて、機械的装置による、空調による室内環境、全て機械装置が建築空間、居住空間をコントロールしてくれる、そのための技術を発展させ、人間はその装置に頼ることで快適に

生きていけるという科学技術神話が浸透している。果たしてこれで良いのか。緊急事態、異常事態が生じた時に、使えない装置には頼ることはできず、人はサバイバルするために、全ての智慧と体力を総動員して、また、周囲の仲間、コミュニティと協力してサバイバルすることが求められる。

地球温暖化による異常気象は灼熱地獄だけではない。線状降水帯による豪雨災害は頻発化している。予想を超えた雨量により、森林は崩れ、穏やかな河川は溢れ、森林からの流木で河川沿いの住宅は崩壊する。こんな事態が常態化する状況にある。この時、強靱な土木・建築技術を投入することだけで対処したことになるのか。いつまた同じ災害が起きるかもしれない。そのたびに、膨大な復旧予算と工事、それに伴うエネルギー使用とCO2排出がされ、より地球温暖化が深刻となるという負のループが加速化する。

このような状況下で、小手先の技術的解決では到底課題は解決しないことは明白である。地球温暖化をもたらした本質的な要因は何か。根本的な解決に向けて、人類はどう方向転換を図るべきかを考える必要がある。それは人々の暮らし、ライフスタイル、人間の生き方、社会のつくり方等の複合的で総合的な解決策を探ることになる。

本稿では、その解決策を模索する一つとして、厳しい地球環境下での、人類のサバイバルの方向について、筆者が1990年代から研究してきたエコロジカルデザイン、パーマカルチャー・デザインの視点を含めて考えてみる。

図1、図2は、パーマカルチャーの理念と手法を1970年代に、豪州でビル・モリソンと共同で考えた、デビッド・ホルムゲンの『未来のシナリオ』（筆者は日本語版に推薦の序文を書いている）に描かれている図である。21世紀初頭で、

地球温暖化と石油資源の枯渇が課題となり始めていた時期であり、石油資源に頼らずかつ地球温暖化に対処するための生き方、ものづくり、エネルギー取得についての問いが世界的にも始まっていた。

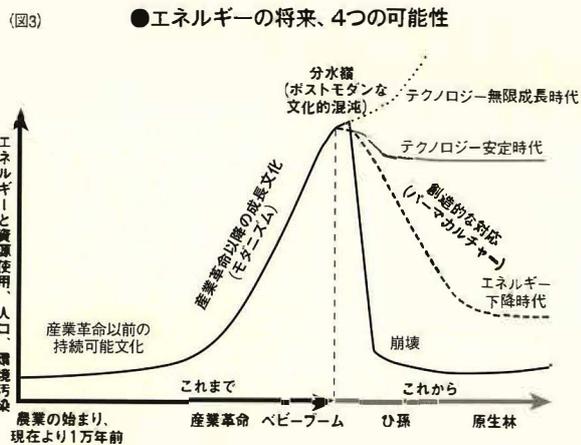


図1 エネルギーと成長の将来 (デビッド・ホルムゲン、『未来のシナリオ』)



図2 気候変動とエネルギー下降時代のシナリオ (デビッド・ホルムゲン、『未来のシナリオ』)

モダニズムの成長神話が瓦解し、膨大なエネルギーに頼れず、かつ異常気象が頻発する近未来、人類はどう生き残るか、そのための理念と手法、デザインの追求の必要性を、ホルムゲンとの交流の中で痛感した。図2の第一象限はトリアージの世界であり、生か死の分別はせざるを得ない状況である。それを避けるとすれば、地球温暖化を緩和し、脱石油の第4象限を目指すこと、地球と緩やかに共存する暮らし方を地域で目指すことを目標とすることである。第二や第三象限の大規模技術に頼る対策は、膨大な地下資源の乱獲を招き、地球温暖化をもたらした近代科学技術の限界、西洋知の限界と課題を意識しない、技術神話のレベルである。

3. 地域の物質代謝を破壊しない、地球に生きるための技術

今日的な地球環境の深刻な問題は、人類の社会経済行動が、地球環境の全体に対して相当なる影響を及ぼした結果である。販売を目的とした商品生産を前提とした資源発掘・生産・流通・消費・破棄の経済原理である。資源発掘は、ハイデッカーの言説である「ゲシュテル(Ge-stell)」と不可分である。人間は自然を資源として、その技術遂行のために駆り立て、自然を収奪する。資資源以外の多面的な性質を持つ自然は非存在となり、隠蔽されてしまう。自然の持っていた、地球環境を維持し生成していく多面的な機能は破綻する。地球温暖化がその典型である。

「売ることを前提とした、あるいは売れることを予想したモノの生産システム」、「生産して売れなければ破棄する。あるいは市場価値を維持、あるいは高めるために、商品を破棄する」という原理で成立している。建築という商品も同様である。その市場が世界市場に拡大したグローバル経済の下では、無駄な生産、無駄な破棄も大量に起こる。

自然を有効に加工し、その使用価値を高めるための生産行為が、地球的規模で交換価値を高めるための生産に変貌した。それも巨大な規模で。地域の誰かのためにモノを作るのではなく、地球上の誰が使用するかもわからず、より大きな交換価値を生み出す商品として物を大量に生産する。人と人との関係性が物と物との関係性として、いわゆる物象化として現れる。150年前にマルクスが資本主義の本質として解明した論理である。

マルクスとエンゲルスは、自然資源の無限性、無報酬性の上に、人間の科学技術の進化により生産性をあげることに、未来の共産主義社会を予想したという、生産至上主義者として、自然のエコロジーを無視してきたと言われてきた。ただ、近年、マルクスの読書ノートの解析が進み、ドイツでのマルクス新解釈や、斉藤幸平らの研究成果により、別の見解も出来てきた。マルクスの資本論における、資本主義により自然界の物質代謝に対する亀裂問題の指摘が再評価され、資本主義の地球的拡大、地球的資本蓄積の行動が、地球環境の破壊、地球のエコシステムの破壊を招いている主要因であることが指摘されてきた。

マルクスは、労働過程は人間と自然との物質代謝の関係であり、資本主義はこの物質代謝を大規模に地球的規模で攪乱させてきたという。マルクスの時代には、まだ、ヘッケルが造語したエコロジー概念は一般化されていない。自然を資源として加工し、人間生活のための物として加工し、人間がその物を使用し、廃棄するという一連の流れは、自然における物質代謝の一環として、自然のシステムの中に良好に収まれば何の問題も生じない。しかし、自然再生できないほどの自然資源の採取、物質代謝では処理できないほどの大量な生産と破棄が起きると、物質代謝は攪乱され亀裂を

生じ、自然界に大病が発生する。マルクスの時代から150年経ち、その物質代謝、自然と人間の物質代謝の規模、広がり、スピードは、何百倍にも肥大化した。それが、人新世、資本新世の時代の今日である。そしてその地球病理が地球温暖化であり、気候非常事態という地球的症状が発現している。

商品化を自己目的としない生産と経済とは何か。狭い範囲での、その土地での、自給自足性の高い生産と経済である。売ることを前提としない人と自然の物質代謝の関係である。交換価値による生産と消費の流れではなく、使用価値による生産と消費の流れである。この物質代謝においては巨大化、過剰化は起きず、環境との親和性は持続する。自然と人の物質代謝という生産が、身近な消費に直接つながり、物質代謝の亀裂は生じない。強大な資本蓄積のない、限定的物質代謝による生産である。資本蓄積のための地球の巨大な物質代謝という地球の人類病が深刻化する中で、その処方箋は、大胆な社会・経済変革しかない。その変革を本気で人類が決意するかはまだ分からない。地域的規模での、小規模で、健全な物質代謝のシステム、それを支える経済、そして、その経済で成立する社会の構築が必至であると考えられる。

4. テレストリアルな世界でのサステナブルデザイン

温暖化ガスの排出の根本原因は巨大な資本蓄積という経済にあるのに対して、そのシステムを変革・破棄するのではなく、そのシステムを活用し環境経済の名の下に、新たな形態での資本蓄積を進める試みであり、到底本質的解決にはならない。また、温暖化ガス削減のための気候工学による地球規模で気候・大気・大海の地球システムを大規模にかつ人為的に操作しようとすることも危険で無謀な、科学技術過信による行為であり賛成できない。後者の適応・災害防止においてもレジリエンス概念を曲解し強靱化と読み替え、巨大でハードな防災工作物の構築や新しい巨大なスマートシティ構築や大規模な生産地移動等が行われようとしている。



図3 地球と人間の関係の過ちを乗り越え転換へ

それらは巨大なエネルギー利用による対策であり、それを主導する主体は巨大な資本とそれに付随する国家資本である。今日的環境問題を起こした本質を問い、そのシステムに頼らないシステム構築が求められる

ブルーノ・ラトゥールが指摘するように、しっかりと地球のテレストリアに降り立ち続けるための、地球とのしっかりと対話し共生したサバイバルな人間圏デザインの再構築が求められている。

日本で最初に気候非常事態宣言をした壱岐市の宣言には、①市民への周知啓発、省エネルギーの推進と併せて、Reduce、Reuse、Recycle、Refuseの4Rの徹底化、②太陽光や風力などの地域資源由来の再生可能エネルギーへの完全移行、③森林の適正な管理により温室効果ガスの排出抑制、森林、里山、河川、海の良好な自然循環の実現とある。この小さい環境世界でのこの種の対応、ライフスタイルの転換、地域経済社会における自然と人間との物質代謝の健全化の試みが必須である。

フランスのセルジュ・ラトゥーシュの主張する「脱成長(デクロワッサン)」は、脱資本主義的地域経済社会の成長に主眼がある。個々の地域の文化、多様性に根差した地域経済の再生であり、地域社会の再生である。ホモエコノミックスという単一資本経済価値で評価される世界からの脱出である。地域風土文化に即した、再ローカリゼーション的な多元的価値、多様なステークホルダーの参画による地域社会構築に期待する。ラトゥーシュは、パーマカルチャー、トランジション、レジリエンスの概念の重要性を指摘する。地域社会再生のための八つのプログラム、①再評価する(利他的価値へ)、②概念を再構築する、脱構築する、(希少性、経済的価値からの自然の豊穡性への脱構築)、③社会構造を組み立て直す(生産装置と社会関係を調整し直す)、④再分配を行う(南北不平等、自然資源の再分配)、⑤再ローカリゼーション、⑥削減する、⑦再利用する、⑧リサイクルする、を提示する。そして、それらを用いて、「地域に根ざしたエコロジカルな民主主義の創造」により、「地域経済の自律性の再発見」と地域イニシアティブの確立を主張する。

「近代の超克」も大きなテーマである。近代は地球生態系の限界を超え、人間の営為には限界がないと突き進んできた。巨大な都市圏域を形成し、富の集中化と巨大な格差社会を構築してきた。地球資源争奪とその無節操な利用継続の不可能性が、地球温暖化、異常気候として現れている。巨大なシステムを維持するための巨大なエネルギーを使用しつづけることの限界が露呈してきている。マルクスが資本論で語るアソシエーションの再評価が、先の物質代謝の亀裂論と併せて始まっている。資本主義的経済成長ではなく、資本蓄積の拡大を目指すのではなく、アソシエーション型(協

同労働、地域社会連帯経済、贈与経済、BIOCITY78号)の地域経済社会を構築していくことが、遠回りでも近回りとなる、気候非常事態に対する的確な処方箋となる。

5. 豊かさ・平等・公正な先史時代の集住空間の存在

アナーキー人類学者として注目されていたデビッド・グレーバーが残念ながら2020年9月に急死した。彼の最後の著書である『万物の黎明』(D・グレーバー(考古学)とD・ウェングロウ(人類学)の共著)が2023年に翻訳出版された。西洋を中心とした都市・世界観、権力による都市支配とそのための西洋型都市構造という神話が爆破した。

食料生産(農業革命)の後に余剰生産物を根拠に都市が発生しその都市を統治するための権力構造が生まれたという、人類進化ヒストリーは否定された。多様な都市形態、平等で公正な集住、都市居住を先史時代から、世界のいたるところで人類は試していた。狩猟採取生活の豊かさと同定住(半定住、季節的定住)空間が紀元前4000年~5000年に創造されていた。農業革命以前に、豊かな生態系での狩猟採取生活による安定的な規模の大きい平等な定住都市ともいえる空間を人類は創造していた。権力機構なし、権力構造なしの平等で自由な都市空間があった。

紀元前4000年頃、ウクライナの西南部にメガサイトのトリポリエでは、権力者の統治や階層性のない巨大定住空間(都市)があったという。ジェームズスコットは、メソポタミアでもチグリスユーフラテスの河口の豊かな湿地帯に広がる採取生活に支えられた都市が多数存在したと主張する。ギリシアの都市国家(市民と奴隷の抑圧的階層性のもとにある市民による民主主義政治権力システム国家)の前に、巨大で真に平等で自由な都市があったという驚くべき指摘である。紀元前100年~600年に栄えたメキシコのテオティワカンという巨大都市(権力的なものではなく集団統治)も同様である。「国家を持たない社会の構築」が歴史的にあった。



<https://nazology.kusuguru.co.jp/archives/45604/2>

図4 ウクライナの西南部にメガサイトのトリポリエ

6. 移動の自由と歓待されるコミュニティ空間の創造

先史時代、あるいは西洋が侵略する前のアメリカ大陸には3つ自由があった、とD・グレーバーたちはいう。①移動の自由、②拘束されない自由(拘束からの逃亡・移動)、③異なる社会的現実を形成し、異なる社会的現実の間を移動できる自由である。移動先での歓待が期待できることが移動の自由を保障していた。これと比較すると、地球温暖化移民、戦争移民を歓待する国際社会になっていない近代国家のシステムの限界は明確である。人類は進歩ではなく退歩しているのかと疑う。

自由を保障する歓待の概念は、19世紀初頭の空想的社会主義者フーリエも提唱していた。フーリエのユートピア論では、物質的、有機的、動物的、社会的運動の四運動を提示し、「農業的家族的結合社会(アソシアシオン・ドメスティック・アグリコル)」という、農業を基盤として社会組織単位の形成を提唱した。歓待をキーワードとし、国家的強制機構からの脱皮し、現行の制度を超えたユートピア、友愛、団としてのユートピアを思考した。フーリエ研究者で仏の哲学者ルネ・シェレルは、フーリエのユートピア思想の骨子に歓待の概念があるとする。この歓待の概念は閉じたコミュニティではなく、開かれたコミュニティを意味する。「協働生活体」(ファランステール)がしばしば誤ってそう見なされてきたような自足集団へと転化し、その自足を守るための障壁に囲まれ、他者に閉ざされた小社会となってしまうのを防止するもの、これもすべて歓待の概念のもとに解釈することができる。『歓待のユートピア』ルネ・シェレル、現代企画社、p113)とする。

さらに「あたかも弧島のような定住地がいくつも併存しているのが地球の調和ではない。・・地球の調和は、多数多様な相互干渉、相互浸透にこそ存在する。」(前掲p114)のものであり、「地球規模でこれに当たるのは、さまざまな移動と歓迎である。調和はノマド的なもの、遍歴的なものである。」(前掲p115)として、ノマド的な移動とつながりの中に、ユートピアの連合を構想する。脱炭素型社会に向けて、閉じることのない連携・連帯を組み込んだ移動性と歓迎性がより重要なキーワードとなる。ルネは、「工業的進歩に付随するイデオロギーは地球を荒廃させるもので、そこには地球に住まうという発想はない。地球に人間的に住まうには、野性的地帯、砂漠、ステップ、自由に行き来できる空間というものが動物にとってもノマド的住民にとっても必要とされる。」(『ノマドのユートピア』、ルネ・シェレル、松頼社、p26)と語る。この「自由な空間・場」は、網野善彦が主張しつづけた日本中世の「無縁・公界・楽」の場とも通じるものがあると感じる。

人と自然が、人と人が出会い、喜びを大切するというも歓

待である。そこには、出来事における共感がある。都市のグリーンゲリヤやコミュニティガーデンや、路上スクワットの共食パーティー等の活動はその一端を提示する。生き残る、ひとりではなく、コミュニティで生き残るための理念と技を人々は獲得していくことが求められている。

何故、西洋都市は閉ざされた中での権力統治による人間居住空間が維持されつづけてきたのか。その集約と統治システムが人新世の巨大で壊滅的な地球環境を構築してしまい、結果としてこの都市システムを破壊するというジレンマに至っている。新自由主義による一方的な巨大資本の経済行為による都市改造、市再開発はその象徴である。近現代都市には王様という権力者はいないが、グローバル経済資本という市場権力者が存在し、差別、貧困、巨大な高層ビルと貧民窟（低所得者住居）の共存という歪んだ都市構造が構築されている。住民生存のための緑や都市自然は市場経済的価値があれば存在しさもなければ否定される。その姿を神宮外苑地区再開発は物語る。本当の自由の獲得のために、サバイバルの智慧と技を獲得するために、市民は覚醒することが求められている。

7. 多様な主体によるサバイバルな都市居住

D・グレーバーは米国で深くオキュパイ運動に関わり、使用していない空建物を占有して使用する（占拠する、スクワッター）運動とも密接であった。筆者が20世紀末に英国に滞在していた時、国会議事堂前広場の芝生を剥がして作物を植えるという過激なグリーンゲリヤを知った。

都市の公共空間の<共>性化である。都市の中の使用されていない荒廃した建物や空地に、住むこと、利用することで、都市の中で死んでいた空間の価値を再創造することにある。ニューヨークのコミュニティガーデンの発生もこのような空地のスクワットの農的利用、グリーンゲリヤとして始まった。道路や空地の所有関係に関係なく、その空間の価値を都市民が再創造する行為である。公共空間の<共>的奪還である。

デンマークのコペンハーゲンでは都市内の空地を若者が占拠し、緑化やアートの実践場としていた事例もみた。都市のオープンスペース、公共用地も民地で長期的な不使用地は、市民が一時的でも自由に活用する権利がある。筆者はパーマカルチャー（農をベースとした持続的生活の総合的デザイン）やエコビレッジ（生態系に依拠した自立的な村）の研究をしてきているが、食料・水・エネルギーそしてコミュニティを共同のDIYで創出することが、閉塞した都市及びコミュニティの再生につながると思う。

20年以上前に、北欧のエコビレッジ調査でコペンハーゲンの解放区を訪ねた。使用されていない軍隊の施設を若者

が占領し、自治区を形成している場所、クノスチャニアである。都市計画での再開発計画地であったが、現在ではこの占拠は公認され、観光地にもなっている。当時は大麻を公に販売できる場所でもあった。建物外観には派手なアートペイントがあり、空地では樹木が植えられ家庭菜園もあり、有名な自転車製造・販売所（リヤカーを前後逆にしたクリスチアーニアバイクという荷台付きの自転車の開発）、野外レストランもある。アーバンエコビレッジともいえる場所である。

コペンハーゲン市内の若者たちによる
不法占拠によるコミュニティ クリスチアーニア

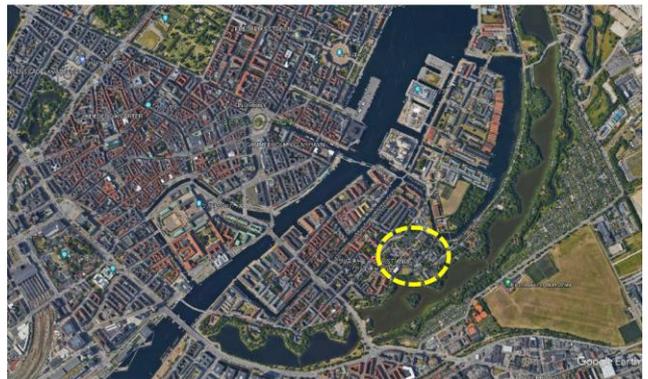


図5 コペンハーゲンの解放区・クリスチアーニア

サンフランシスコのアーバンエコビレッジでも、20年以上前に住宅前の公道を住民が占拠してパーティーを開く行動もあった。都市公園の開放とそのためのアクションが今、必要である。都市公園という概念は公的に管理され市民は利用のみに特化し、限定的な利用しかできない不自由な空間である。これからの開放が市民の共同の力で実現しつづけることが求められる。

8. サバイバル・コミュニティへの多様なチャレンジ

筆者は農村地域での住民参画による土地利用計画・むらづくり・まちづくりで研究をスタートした。地域に根差した課題を地域住民と行政が共同して解決する

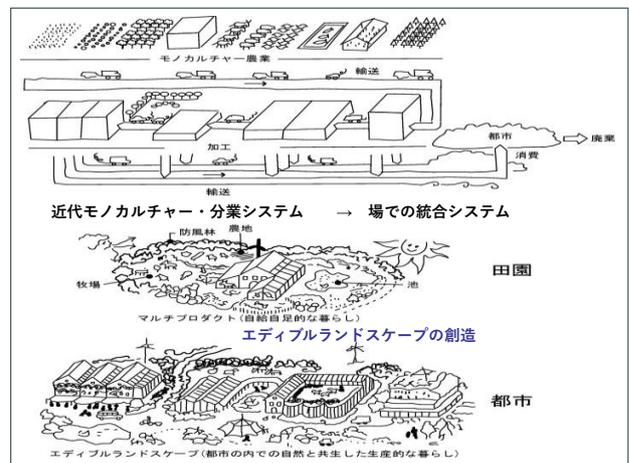


図6 近代的なモノカルチャーの食・エネルギーの生産システムから脱し、都市でも農村でも生態系と調和したマルチプロダクトへの転換

る途を探る研究であり実践である。1990年代からパーマカルチャーやエコビレッジ、環境市民のDIYによる食・建築・コミュニティづくりについて、国内外での実践的研究を進めてきた。シティファームやコミュニティガーデン運動は、消費都市を脱し生産+消費+分解+生命都市への転換を市民ベースで進めるものである。近年、日本でも同様な市民活動が活発化しつつ、より市民主体、コミュニティ主体による実践の深化が求められている。

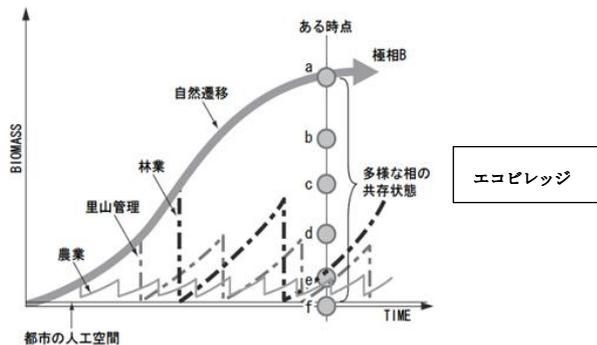


図7 自然遷移と共存した人間居住・コミュニティとしてのエコビレッジ



図8 米国ニューヨーク州にあるイサカエコビレッジ

図7は、地域の自然遷移との共存した人間居住地の在り方としてのエコビレッジの意義を図化したものである。自然を加工し、改変しつつ人間が生き続けるためにどう自然との関係性を持続的に構築していくべきかをイメージしている。

農・食・エネルギー・建築を個人だけでなく、コミュニティをサバイバルさせるための智慧、技術、技能、システムが必須である。また、ここの住民たちがDIYの技を学習し、獲得し実践していくことであり、その学習と実践の場が必要である。市民が都市で「野生の思考と行動」に覚醒してきているともいえる。家畜を飼い、都市のマイノリティーの子ども達の情操・環境教育の場、農的体験の場を提供する。安藤昌益の「直耕」の現代版である。

2000年頃からは英国のトットネスを出発として、パーマカルチャー理念を拡大し、地域のレジリエンス（今日流行の言葉の先駆け）をキーワードとした、エネルギー・建築・食を地産地消する市民と行政の自立共生運動、「トランジションタウン」運動が英国から世界に波及している。日本での地産地消運動のより地域住民密着型であり、かつ、コミュニティ主体の実践の方向を示唆している。



図9 英国トットネス（トランジションタウン発祥地）のフリーマーケット

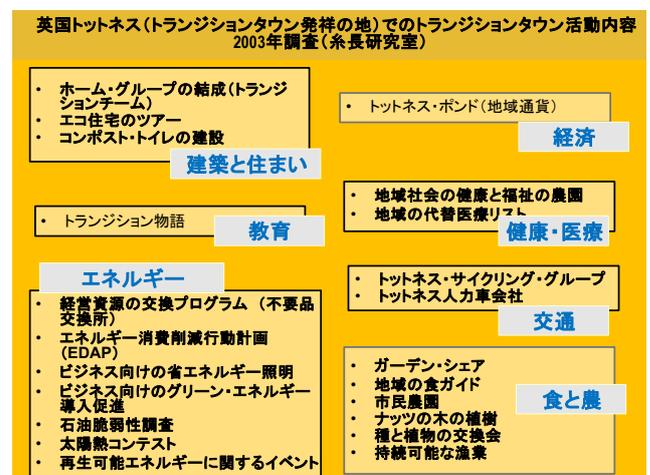


図10 英国トットネスの市民の活動内容

水道の民営化や、公共施設、都市公園でのPFI化が昨今進められつつあるが、大きな課題がある。人間の命と暮らしの基盤である公共財、社会的共通資産を、資本主義の論理で管理運営・経営することは非常に危険である。これに対抗するものとして、西洋の市民や基礎自治体の一種の自衛的思想をベースとしたミニシパリズム（地方自治主義）運動も活発化している。地域主体、地域の多様なステークホルダー間の地域自立共生型の運動である。イバン・イリーチが提唱した自立共生（コンヴィヴィアリティ）の理念にも通じる。

これらのボトム運動の根底には、脱炭素、地球を痛めるライフスタイルの転換、グローバル経済からの地域経済社会の防衛、新たな地域社会経済の創造に向けた市民の意識の高揚がある。脱炭素型の建築・まちづくりもこの方向と連動して進めて行くことで、現在と未来の地球に対する責任の道筋が見えてくる。ラトウシュらの脱経済成長による再ローカリゼーション、社会連帯経済、ワーカーズコープや労働者協同組合(2020年に日本でも法制化された)の理念と手法等を取り入れ、地域に即した社会経済文化運動して発展させることが、人類非常事態に対する地道なテレストリアル処方箋となる。

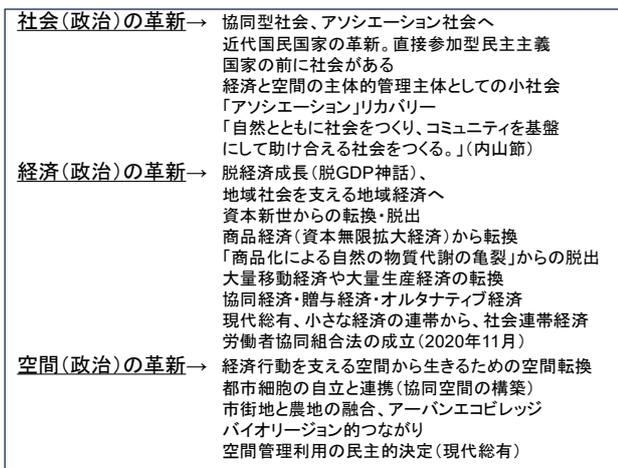


図11 サバイバルのための社会・経済・空間の革新手法
新たなサバイバルのためのチャレンジは、社会、経済、空間のレベルで求められる。それは同時に政治、社会的決断のシステムの転換でもある(図4)。それらの革新は、地域に根差した革新であり、生活者が主体的に協働の力で進めることである。

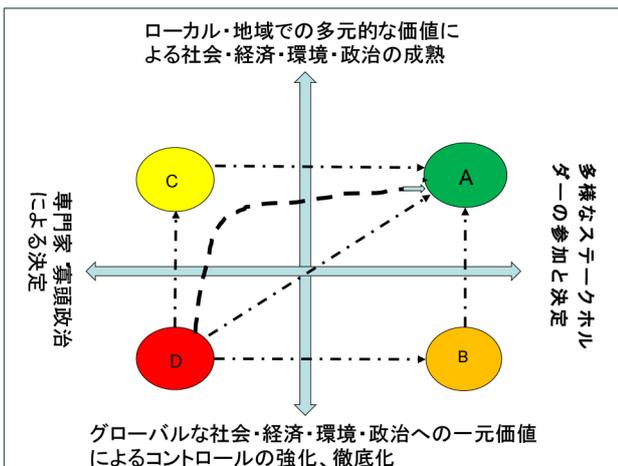


図12 地域での多様な世界構築への道
現在のグローバルな仕組みから脱して、多様なステークホルダーが主体的に参加した、脱炭素でより豊かで持続性のある社会・経済・空間形成に向けての歩みを、ここの地域で、テレストリアルに依拠して進め

ることが、厳しい状況下に対する真つ当な回答である(図12)。

筆者は、生命(生物、命)と都市(人工物、人間居住)、農村を結び付けた新たなデザインを模索してきた。パーマカルチャーによる統合デザイン論を参考にしつつ、長年生物・農学・工学・社会科学の統合智とデザインを探り続けてきた。地域自然への信頼を基礎に自然・生命との共存した建築・都市・地域について、そこに生活する人々によるエコロジーデザインの方向を追及してきた。が、さらに今日、人新世の時代を迎え人為により自然は痛み、かつ自然が人間への深刻な脅威となるダークエコロジーの中での人間と人間以外のもののサバイバルのための理念とデザインを模索する時代に突入している。

★本編は、2025年度日本建築学会大会地球環境委員会PDでの筆者の原稿をリライトしたものである。

参考文献

1. 糸長浩司、人新世時代における気候変動への建築・都市・地域の応答主旨説明、日本建築学会大会協議会地球環境部門、2023
2. D・グレーバー、D・ウェングロウ、『万物の黎明』、光文社、2023
3. ジェイソン・ヒッケル、『資本主義の次に来る世界』、東洋経済新報社、2023
4. 糸長浩司、気候非常事態という人類の病への処方箋、『BIO CITY 82号 特集 気候非常事態宣言!』、ブックエンド、2020
5. 斉藤幸平、『大洪水の前に:マルクスと惑星の物質代謝』、堀之内出版、2019
6. ブルーノ・ラトゥール、『地球に降り立つ』、新評論、2019
7. 網野善彦、『無縁・公界・楽』、平凡社、1996
8. 糸長浩司監修、『BIO City 39号 特集 ユートピアとしてのエコビレッジ』、BIO City、2008
9. セルジュ・ラトゥーシュ、『経済成長なき社会発展は可能か?』、作品社、2010
10. デビッド・ホルムグレン、『未来のシナリオ』、農山漁村文化協会、2010
11. ルネ・シェレール、『ノマドのユートピア』、松頼社、1998